

「お母さん、ちょっとお話があります。」と小児科医に呼び止められたのは産後三日めの入院中でした。私も思わず、「私もです。」と答えました。平成二十七年四月下旬、我が家に産まれた待望の第四子となる女の子。とても安産でスルンと出てきてかわいい産声をあげてくれました。いざご対面してみると上の三人とはあまり似ていない丸顔。おとなしくてミルクを飲むより寝てばかり。ある授乳の時、顔つきがふとダウン症に見えたではありませんか。「え？そうなの！？でも何も言われていないし……。聞いてみる！？聞いた所でどうなる?!」そんなモヤモヤを抱えていたので小児科医の呼びかけに私の思いは疑問から確信に変わりました。これが私と障害者の出会いです。

小児科医からの話では心臓疾患があるかもしれないがいたって元気で順調、私と一緒に退院して家で上の子達と同じ様に育ててあげて下さい。との事でした。話を聞いた私は、ただただ涙が止まりませんでした。ショックでも何でもなく、聞いた事もない疾患があるにも関わらず懸命にミルクを飲んでいて我が娘を想うと愛しく、そして小さな命を尊く感じました。もちろん漠然とした大きな不安から小さな不安、たくさんの不安が一気に押し寄せてきましたが、「我が家を選んでくるなんてチャレンジャーね、手荒い育児しかしてもらえないけど、楽しい家だとは思うよ。」なんて気持ちで我が家へ迎え入れる事ができました。ちなみにその時に小児科医にした質問は「風邪をひいたらどこへ連れて行けば良いですか？」でした。そのくらい、障害者、ダウン症に対して無知だったのです。

退院して始まった四人育児。こなす事に精一杯でダウン症の事を考える暇もありません。娘の事を知って健常の子どもの理解が早い事はすごい事で、だから兄姉に優しく接する事ができるかもしれない、と当初は思いましたが、無理！ダウン症なら夜中の授乳も常に優しく丁寧にできるかも、とも思いましたが、これも無理！やっぱりどの子も同じ、憎くてかわいい我が子でした。

産後8ヶ月が経ち、希望して療育園でリハビリを受ける事にしました。がしかし、そこで見た光景は私の心に重くのしかかってきました。たくさんの装具、ベルトのついた直角背もたれの椅子、子どもの手の届かない所にひと部屋ずつに付けられた鍵……。障害があったら特別な何かをしなくてはいけないのかな、上の子達とは違うのかな……。家にいるとただの末娘なのに……。リハビリの日は、娘と頑張った達成感がある反面、“障害”をつきつけられ、一日が終わるとドッと疲れていました。それでも人間とは勝手なもので、抵抗があった直角イスも娘が初めて座った時は“ジェットコースターみたいでかわいい。”と思ってしまい、今では鍵のついた部屋にも特に想いはありません。支援を必要とする娘の仲間が歩ける食べられる為の装具なら何て素敵なお助けアイテムではないですか。そう言えば療育園の立地も、以前は、^{ひとけ}人気の少ない場所に隔離されているのだと思っていたのですが、い

ざ通う立場になると、確かに人気は少ないですがその方が利用者にとって心穏やかに伸び伸びと過ごせるからだという事に気がきました。捉え方で物事はプラスにもマイナスにもとれるのです。どこにいても変わらないのは、子ども達のただただ前を見ている眼だと思います。

この春、娘も三歳になりました。心の中は一歳半過ぎでしょうか。自我がでてきて振り回される毎日です。ダウン症は百人から千人に一人と言われている知的障害です。もし、ダウン症ばかりで百人から千人に一人の中に私がいたら、私は障害者になるのでしょうか。知的障害というものは、結局、メジャーかマイナーか、数の多い者が勝手に作り出しているのかもしれない。

娘のおかげで様々な事を考える機会が増えました。悩む事もあります。やはり不安も。知らない事もまだまだあるでしょう。ただ一つわかっているのは“同じ命” だと言う事。私はこれからも、障害があるなしに関わらず毎日怒ったり笑ったり、目の前の四つの小さな命と向きあい、過ごしていきたいと思います。